



ひ
む
き
じ
ぞ
う

日向地蔵

整備完成記念

目次

第一部

開眼之疏	4
整備完成にあたり	6
寄付者御芳名	8
収支一覧	12
実行委員	14

第二部

由緒	16
日向地藏の歴史	18
町名のおこり	22
京都新聞記事「伝承の武具見つからず」	24
写真集	26

第一部



日向地藏尊

開眼之疏

謹み敬つて 来迎願王阿弥陀如来 発遣教主釈迦牟尼如来 十方三世一切諸仏 極樂界会 一切三宝 に申して言く

方に今 本堂場を莊嚴し 香華灯菓等を献供し奉り 恭しく 日向地蔵大菩薩 開眼供養の大法会を 嚴修せんとす

抑々 日向地蔵尊は 安政五年 十月 陽泉亭 松村徳翁居士の発願により 建立せられ 併せて 小石に一々の經文を記し 一字一石 大乘妙典之塔を建立せられ 永えに 当町内の信仰の中心と 祀られたり

途中 廃仏毀釈の法難にも 信篤く擁護せられ 御避難の縁仰ぎて その難を免れ給いたり 以来堂宇新築修繕を重ね 風致清浄ならしめること幾星霜

悲しいかな その莊嚴は暁月 影を漏らし 風雨覆うに耐えざるなり

かるが故に この度 日向地藏尊 堂宇の再興を発願し 当 吉祥院西ノ茶屋町内会 小柴美仁を実
行委員長 長谷川善春を副実行委員長に据え 町内会員 周辺住民 信者等 勧めて助力を乞う
幸いなるかな 志を一にして 凡そ四ヶ月の時を経て 工畢り 素志満足して 今日を以って 縁者
此処に相集う機会を得 此れ歡喜に堪えざるものなり

是に依りて 先祖先亡より連綿たる 菩薩報恩の誠を尽くして 茲に開眼法要の儀を勤め 仰ぎ願
わくは 日向地藏大菩薩 本堂場に降臨し 堂宇の無衰無変の懇念を 照鑑証知し 我等が微衷を
哀愍納受し給わん事をと爾云

維時 平成三十年 五月 二十七日

延命山西蔵寺 現住 沙門 超空宏祐 並びに 参詣大衆 啓白

整備完成にあたり

このたび、八十九年ぶりに日向地蔵堂の修復ならびに周辺敷地の整備を完成し、平成三十年五月二十七日、導師西蔵寺住職田中様、副導師明吉寺住職辻本様のもと、日向地蔵の開眼法要を無事執り行うことができました。これはひとえに、整備事業にご理解をいただき、ご支援とご協力を賜った多くの方々のお陰と深く感謝しています。町内会の皆様、両寺ご住職、寄付や奉納をいただいた多くの皆様、実行委員の皆様、その他関係者の皆様、誠にありがとうございました。また、将来を見越して多額の修繕費を積み立てていただいた過去の町内会役員の方々に對しても、感謝の念に堪えません。

今回の整備事業では、傷みが激しく傾いていた地蔵堂の修復だけでなく、敷地西側擁壁の強化、地蔵堂前スペースの拡張、小石仏群を祀る屋根の整備、井戸水ポンプの設置、「西国街道」石標の設置などを行いました。おかげで風景は刷新され、西国街道を道行く人々が今まで以上に足を止めて日向地蔵にお参りされるようになり、修復できて本当に良かったと心から喜んでいます。

今年の地藏盆は、面目を一新した日向地藏堂の前で行います。時代と共に子供たちの遊びは変わっても、お地藏さんの前で楽しく無邪気に遊ぶ子供たちの姿は今も昔も変わりません。そうした子供たちの姿を見て嬉しく思う親の気持ちも変わりません。

日向地藏尊と大乘妙典塔は、子供たちの健やかな成長と世の平安を願って陽泉亭松村徳翁居士によって建てられたものです。徳翁居士の思いを受け継ぎ、私たちも日向地藏尊と大乘妙典塔を子々孫々末永く大切に守り続けていきたいと思っています。

平成三十年七月

日向地藏整備 実行委員長 小柴美仁

寄付者御芳名

金十五万円

小柴 美仁

金十万円

石原 信男

株式会社 星川鉄工所

杉本めつき工業 株式会社

岡田 一三

小柴 カズエ

八木 康次

西村 俊治

長谷川 善春

日光タイヤー工業所 小柴 強

平塚 健

西ノ茶屋町シルバー会

合名会社 一秀 中塚雅和

平尾 建築

西京区桂

金五万円

秋山 昌一

河口 浩

金三万円

cofe & bar Anna 田島友子

金二万円

トヨタ輸送中部 株式会社

ミハトゴム 株式会社

東 隆治

滋賀石油 株式会社

京滋日冷サービス 株式会社

奥村組土木興業 株式会社

京都中央信用金庫 吉祥院支店

株式会社 伊藤商店

京都三菱自動車販売 株式会社

フェイバリットビューティー

洛王セレモニー 株式会社

池ノ内町
石原上川原町

金一万円

東政江

荒木孝

歌川孝

亀飼禮吉

奥川久子

榊本直

岩見紀恵

水野健太郎

橋本眞佐美

稲垣克己

榎敬子

平塚智久

美容室つくし 戸川晴代

安田晃三

檜垣晃彦

福田美智代

株式会社イマムラ

山本武生

乾睦亮

井ノ口町

西浦町

井ノ口町

金五千円

仁本東甲

岡田光正

角田康介

市田雅志

三木百合恵

脇下勝己

坂本久榮

清水成身

中川伊佐美

沢井秀一

片木美津子

藤原吉市

石垣ひさ子

高木保典

深尾万里子

大槻さと子

東朋美

東俊之

松下弘子

栗東市

右京区嵯峨

松下 麻子

辻川 光一

村岡 直樹

吉田 長太郎

深見 敦彦

檜垣 孝

檜垣 明

松田 琢磨

山本 悠雲

山本 瑩子

内田 晃二郎

小柴 祐太

小柴 啓太

和風料理まったく 橘川裕明

坪井 健

神田 和美

山田 恭弘

境 春子

山田 邦夫

大八木 美子

西京区榎原

彩華ラーメン 中本安雄

株式会社 オリオン化工

ワークシヨップさわだ

colors 山川綾子

小柴 涼子

小柴 昌隆

金三千円

岡本 一

金二千五百円

中島町

辻元 智枝子

金二千円

トラットリア カサグランデ

金千円

匿名

宇治市
宇治市
西京区大枝

石原上川原町
西浦町

石原長田町
西浦町
中京区西ノ京

石標「西国街道」

伏見区横大路

中川一雄

献灯台

池ノ内町

株式会社 タナカテック

賽銭箱

西村 俊治

小柴 強

鰐口紐

小柴 美仁

長谷川 晴三（善春）

井戸用電動ポンプ

稲垣 克己

手水鉢

山科区勸修寺

小坂農園

手水鉢加工・由緒碑修理

西村 俊治

芳名板墨書

小柴 千裕

玉垣「寄付金十万円以上の方」

小柴 美仁

石原 信男

岡田 平馬（一三）

小柴 仁一郎・カズエ

八木 康次・弘子

西村 俊治

長谷川 善春

日光タイヤー工業所 小柴 強

平塚 健・恭子

シルバー会 代表 石垣・坪井

株式会社 星川鉄工所 金 永萬

杉本めつき工業 株式会社

合名会社 一秀 中塚雅和

平尾建築

（敬称略）

（注）線付きは故人名による寄付・奉納です。

収支一覧

収入

寄付金	二、三四六、〇〇〇円
地蔵尊会計から	
・修繕積立金	二、〇三三、五八一円
・修繕積立金	五三二、三四二円
・普通預金	八三一、四五〇円
町内会会計から	
・修繕積立金	七三八、九三二円
・修繕積立金	五六九、七二四円
預金利子	五円
合 計	七、〇五二、〇三四円

支出

工事費	
・地蔵堂修復	二、五七八、二〇八円
・外構	一、一八四、七四〇円
・擁壁強化	八四八、〇五〇円
・井戸、電気	四八一、九〇〇円
・器具庫	二八六、二六〇円
・石仏屋根	一七四、〇二〇円
・解体撤去、他	二四六、八二二円
・消費税	四六四、〇〇〇円
玉垣、石標	四七〇、八八〇円
石標パネル	一〇、〇〇〇円
旧玉垣修理	五四、〇〇〇円

記念冊子	七一、九二八円
御布施（三人日）	六〇、〇〇〇円
発遣供養菓子、花	二、一二七円
開眼法要紅白饅頭	三一、五〇〇円
開眼法要子供菓子	八〇三円
ローソク、線香、マッチ	一、〇三二円
献灯台奉納プレート	六、八〇四円
水はね防止マット	一、八九三円
ゴミ箱	一、八三五円
散水ホース	一、一二〇円
防水スプレー	一、〇二七円
防犯用ワイヤ	七三四円
吊り下げフック	五四〇円
賽銭箱錠	五三七円
その他備品	五五〇円
封筒、切手	三、五一五円

ゴム印	一、七四九円
領収証	八六四円
その他事務用品	一、〇五二円
延長ケーブル焼損補償	七、二一四円
京都新聞著作物使用料	三、二四〇円
契約書収入印紙（折半）	二、五〇〇円
打合せ高速代	二、一二〇円
会議費	四三、二四〇円
コピー	五、二三〇円
合計	七、〇五二、〇三四円

実行委員

委員長

小柴 美仁

副委員長

長谷川 善春

委員

石原 綾子

稲垣 克己

河口 浩

小柴 強

西村 俊治

橋本 眞佐美

平塚 りえこ

水野 健太郎

八木 康次

第二部



元・町内会子供神輿（株式会社西建所蔵）

由緒

『日向地蔵尊縁起』より（漢字と仮名を現代表記に改めています）

往昔おうせきより日向地蔵尊ひむきと崇め奉りあが たてまつ世人安産を祈りせじん疫癘厄難の息滅を請してえきらいやくなん そくめつ靈驗を蒙るもの後を絶れいげん こうむ あとえず

明治十二三年頃はいぶつきやく廢仏毀釈の惡風伝るや時の槇村知事は石仏狩りなる暴令を出して没収につとむまきむら
此の尊もその難を免れずまぬが村の信者等驚きて俄に抱えてつりて僻難せりにわか ひなん

数年の後事止みや かえ還り安置し給うたま

その後五十余年の今日此の地域より一小礫しょうれきに護字の墨記ごじ ぼっきされたるを探し得 更に数斗すうとの小石に
一々經文字の記しるされたるが掘出され さてはと古老の言こうらうを含みその暴令當時に散失せし一字一

石大乘妙典塔だいじようみょうてんを探し出せり

在所ざいしょには相当の石品を換え贈りぬおく

今は之れも此処ここに還着かんちゃくし給うたま

依よりて信徒有志者相集り地藏尊堂を修理し大乘妙典塔下だいじようみょうてんに一字一石の經文磔きやうもんれきを龕がんし繞めぐらすに玉

垣を以てし石階せっかいを疊たたみ植樹風致清浄ならしむ

塔背に知る安政五年十月建立陽泉亭松村徳翁居士書写功德くどくの信意にも相叶あひかないたり

之れ偏ひとえに列名信者の熱誠ねっせいの致す所なる

尊は永く古の信者等いにしえを影向えうきやうし在すましま

大乘妙典とは恐くは此の大功德も蓮花と俱に地上に涌出開敷ゆうしゆつかいふし給うたまを尔云しかいう

法末

善弘記

昭和四年十月十日

(注) 善弘は香泉寺の先々代ご住職です。

日向地蔵の歴史

日向地蔵尊は今から百六十年前の江戸時代末の安政五年（一八五八）に大乘妙典塔とともに陽泉亭松村徳翁居士によって建てられました。安政という時代は、日本各地で相次いで大地震が起こり、江戸幕府が鎖国から開国へ政策転換する中で安政の大獄が起こるなど、たいへん混乱した不安な時代でした。そんな世の中を憂えた徳翁居士が、平和で安心して暮らせる世の中になることを願い、法華經の文字を書いた小石を埋めた上に大乘妙典塔を建て、日向地蔵尊を祀られたのです。



一字一石大乘妙典塔

明治時代の初め、仏教を捨てようという廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）運動が日本中で起こり、日向地蔵尊も危うく破壊されそうになりましたが、地元の人々によって無事に守られ、大正二年（一九一三）に地蔵堂を新築して再びお祀りすることができました。昭和四年（一九二九）には文字の書かれた小石の発見をきっかけに行方不明になっていた大乘妙典塔が探し出され、地蔵

堂の修理と周辺敷地の整備が行われて、この時に『日向地蔵尊縁起』がまとめられました。そして昭和五十三年（一九七八）、地元有志の人々が土地を買い取って共有財産とし、平成十四年（二〇〇二）からは町内会が法人となってお堂と土地の管理を続けています。

さて、陽泉亭松村徳翁居士とはどんな人だったのでしょうか？ 残念ながら詳しいことは分かっていませんが、関係ありそうな陽泉亭の情報についてご紹介します。

『京都府紀伊郡誌』によれば、明治五年（一八七二）に創設された吉祥院小学校の最初の名前

吉祥院尋常高等小學校

（吉祥院村大字吉祥野）

明治五年十月十七日、吉祥院堂小字舟戸に創設し、校名を陽泉亭と云ふ、十年四月字西中は吉祥院聯合吉祥院、西中、石島より分離す校名陽泉亭は明治九年に廢せられ無名なり、西中は分離して校舎の新築を行ひしも再び合併し、其校舎を本村に移し、勉哉學舎と稱し、夜學校舎に充つ、後吉祥院尋常小學校と稱し、四十三年四月高等科を併置するに及び、現今の校名となる。

學校敷地坪數 一、二九四坪
學級數 〔創設當時三學級〕
現在 七學級
卒業生 一、四五四

教室數 七
在學兒童數

〔創設當時 一七八〕
〔大正四年一月末 三九三〕

が陽泉亭でした。が、創設当時の小学校に正式名称はなかったらしく、創設前に付近にあった寺子屋の名前からそう呼ばれたものと思われます。現在、小学校の校庭北側に昭和四十二年卒業生による創立百二十周年記念植樹の石碑が建っていますが、これを逆算すると創立は一八四七年で、正式な小学校創設の二十五年前、大乘妙典塔建立の十一年前ということになります。

また、江戸時代の後期、吉祥院村に陽泉亭という池泉庭園がありました。寛政十一年（一七九九）刊の『都林泉名勝図会』に庭園主人の松翁が陽泉亭を造ったと書かれているので、庭園の造営は大乘妙典塔建立より五十九年以上前の出来事になります。ちなみに、庭園の陽泉亭が吉祥院村のどこにあったか不明ですが、私は池ノ内町付近と推測しています。

徳翁居士が日向地藏尊を祀り大乘妙典塔を建てる前の歴史はどうだったのでしょうか？ 敷地内にある他の石造物を見てみましょう。

西国街道沿いに移設した愛宕山常夜灯には、大乘妙典塔より少し古い天保五年（一八三五）の銘があります。今回



愛宕山常夜灯

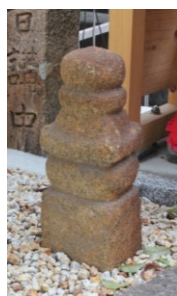
敷

の整備事業で表面をきれいにし、初めてこの銘に気付きました。

新たに屋根を設けてお祀りした小石仏群の中に、男女二体の神が並んだ双体道祖神があります。道祖神が多く作られたのは、江戸時代後期の十八世紀から十九世紀で、その他の小石仏も同時期に作られたものとみられます。

小石仏群の前にある小型の五輪塔は、ひとつの石から彫り出した一石五輪塔という古い形式のもので、室町時代（十五世紀半ば）から江戸時代初期（十七世紀半ば）にかけて流行したものだそうです。

西国街道のうち京都から西宮までの間は山崎街道とも唐街道（からかいどう）とも呼ばれています。唐街道の名前は、豊臣秀吉が朝鮮出兵（一五九二年、一五九七年）の際に派兵路として整備したことに由来しており、一石五輪塔の存在と考え合わせると、日向地蔵の起源は唐街道の成立した十六世紀末、今から約四百年前までさかのぼれそうです。



一石五輪塔



双体道祖神などの小石仏群

町名のおこり

『吉祥院小学校百周年記念誌』より

今でこそ西国街道は裏通りとなり、国道一七一号線に幹線道路としての使命をゆだねているが、ひと昔前までは、京都と西国を結ぶメイン・ルートとしての役割りを果たした大切な道路であった。

西国から上って来た旅人が、京都の街を目前に、「三軒茶屋でひと休みして京に入ろう」と街道の休憩所扱いにされたのが、現在の西ノ茶屋町であった。

勿論、町名の由来もその茶屋からとられたものである。

町名のおこり
(西ノ茶屋町)



西大路九条

今でこそ西国街道は裏通りとなり、国道一七一号線に幹線道路としての使命をゆだねているが、ひと昔前までは、京都と西国を結ぶメイン・ルートとしての役割りを果たした大切な道路であった。西国から上って来た旅人が、京都の街を目前に、「三軒茶屋でひと休みして京に入ろう」と街道の休憩所扱いにされたのが、現在の西ノ茶屋町であった。



西之茶屋のお地蔵さん

とられたものである。茶屋と言っても、祇園など花街の茶屋ではなく、手甲脚はんにわらじばきの旅人が、わらしの紐を締めなおし、弁当を開いて都に入る前の腹ごしらえをする茶店のことである。茶店は、街道の西側に三軒あり、人々はこれを、「西ノ茶屋」「上ノ茶屋」「下ノ茶屋」と名づけて明治以前は街道を往来する旅人の湯茶の接待で大いに繁昌したと言われている。その後、西高瀬川に舟運が開かれたことにより、旅人の流れが変わり、往年の面影は消え去ったが、吉祥院の西に位置する処から、人々は此の地を西ノ茶屋と呼ぶようになったことである。

茶屋と言っても、祇園など花街の茶屋ではなく、手甲脚はんにわらじばきの旅人が、わらじの紐を締めなおし、弁当を開いて都に入る前の腹ごしらえをする茶屋のことである。

茶屋は、街道の西側に三軒あり、人々はこれを、「西ノ茶屋」「上ノ茶屋」「下ノ茶屋」と名づけて明治以前は街道を往来する旅人の湯茶の接待で大いに繁昌をしたと言うことである。

その後、西高瀬川に舟運が開かれたことにより、旅人の流れがかわり、往年の面影は消え去ったが、吉祥院の西に位置する処から、人々は此の地を西ノ茶屋と呼ぶようになったとのことである。

京都新聞記事 「伝承の武具見つからず」

「鳥羽伏見の戦いで敗走、埋めた…」

伝承の武具見つからず

南区・日向地蔵 石塔移設で調査

「地域の文化大切に」

京都市南区吉祥院西ノ茶屋町で改修中の「日向地蔵」の地蔵堂で、近くにある石塔が13日に移設され、地中調査が行われた。町内では石塔の下には経(きょう)の文字を書いた小石のほかは武具が埋まっていると伝わっているが、地元住民が興味深げに作業を見守った。

「鳥羽伏見の戦いで敗走、埋めた…」

伝承の武具見つからず

南区・日向地蔵 石塔移設で調査

「地域の文化大切に」



大衆妙典塔の下に埋まっていた小石を掘り出す
地域住民たち(京都市南区吉祥院)

京都市南区吉祥院西ノ茶屋町で改修中の「日向地蔵」の地蔵堂で、近くにある石塔が13日に移設され、地中調査が行われた。町内では石塔の下には経の文字を書いた小石のほかは武具が埋まっていると伝わっているが、地元住民が興味深げに作業を見守った。

同地蔵の地蔵堂近くにある石塔は「字一石大衆妙典」と呼ばれている。記

録によると、石塔は1855年の建立で、7万石近くある経を一つ一つ書いた小

石が納められた。石塔と小石は明治時代に廃仏毀釈で

行方不明になったが、1929年に現在地に戻されて

いた。地元の西ノ茶屋町内

近所の自営菜園堀克己

ん(8)によると、子どもの頃、地域の古者から「鳥羽伏見の戦いに向かう兵が一服する場所、敗走する際に置いていった刀ややりを埋めども聞いたことがある」という。

だが、刀ややりは見つか

らず、地蔵堂側事業実行委

員長の小柴美(きん)(58)

は「昔はまどまかに埋ま

っているかもしれない。地蔵堂は塔は地域の文化とし

て大切にしていきたい」と語った。

小石は14、15日の午前10時から正午まで現地一般公開する。(加藤華江)

2018年4月14日(土) 京都新聞朝刊 22面掲載
(京都新聞社提供)

同地域の地藏堂近くにある石塔は「一字一石大乘妙典塔」と呼ばれている。記録によると、石塔は1858年の建立で、7万字近くある経を一つ一つ書いた小石が納められた。石塔と小石は明治時代に廃仏毀釈（きしゃく）で行方不明になったが、1929年に現在地に戻されていた。地元の西ノ茶屋町内会は約90年ぶりに地藏堂の改修作業を進めている。

市文化財保護課の職員と住民たちがシャベルやつるはしで地中を掘り進めると直径45センチ、高さ17センチの石の容器が出てきた。中には、「佛」や「若」などの字が墨で記された小石215個と寛永通宝1枚が出てきた。

近所の自営業稲垣克己さん（62）によると、子どもの頃に地域の古老から「鳥羽伏見の戦いに向かう兵が一服する場所で、敗走する際に置いていった刀ややりを埋めたとも聞いたことがある」という。

だが、刀ややりは見つからず、地藏整備事業実行委員長の小柴美仁さん（59）は「武具はまだどこかに埋まっているかもしれない。地藏や石塔は地域の文化として長く大切にしていきたい」と語った。

小石は14、15日の午前10時から正午まで現地で一般公開する。

写真集

(写真提供：八木康次氏、小柴強氏)



2017年9月10日 整備内容説明会



2018年1月28日 発遣供養



2018 年 3 月 4 日 西側擁壁



2018 年 3 月 12 日 地蔵堂基礎



2018 年 3 月 28 日 地蔵堂木組み



2018 年 4 月 15 日 大乘妙典塔下の埋蔵容器と埋蔵品



2018 年 4 月 15 日 大乘妙典塔下の埋蔵品



2018 年 4 月 21 日 大乘妙典塔



2018 年 4 月 22 日 地蔵堂瓦葺き



2018 年 5 月 10 日 玉垣



2018 年 5 月 14 日 全景



2018 年 5 月 27 日 開眼法要



西ノ茶屋町内会
日向地蔵整備実行委員会
2018年7月